
俺様王子×メガネ姫

YUME

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺様王子×メガネ姫

【Nコード】

N5142K

【作者名】

YUME

【あらすじ】

俺様王子…岡野 龍・ 高1

メガネ姫…中山小春・高2

二人のラブストーリー…!!?

1

わたしは、中山 小春。
今は高校2年の夏。

皆はわたしを、「暗い」と言う。

でも、そんな奴らと関わる気は無い。

わたしは、わたしだから。

くろぶち眼鏡に、髪型はみつあみ、メイクはしない。

そのの、何が悪い？

今日は、1時間目から理科で、理科室に行かなきゃいけない。

椅子から立って、理科室に向かう。

一緒に行ける友達はいないから、廊下を一人で歩いている。

ボンッ

痛い…

『あらゝ、中山さん。暗くて見えなかったはゝ。アハハ。』

同じクラスのむかつく3人の女子。

わたしの事が嫌いなら、話しかけてこないでよ…。

わたしだって…、時々どうしようもなくなる…。

壁に当たった腕が痛い…。

「大丈夫？」

1年…？

わたしに、1年らしき男子が話しかけてきた。

「先輩、腕…怪我してない！？。」

「えっ?…」

腕を見たら、壁の掲示板のカドにあたっただらしく、少し血が出てきていた。

「あつ、血…」

「うわっ、先輩…保険室!行かなきゃ。」

「いっ、いいよ…このぐらいい。」

わたしの近くにいた1年を押し退けて理科室に向かおうとする。

「ヒャッ！」

怪我と反対の腕を捕まれた…。

「待てよ！。怪我してるくせに無理してんじゃねーよ。」

「えっ？」

なんか、さっきと口調が違うような…。

保険室

わたしは結局、保険室に連れていかれた…。

「あれゝ先生いないね？先輩！」

口調は元に戻ってるんだ…

「先輩？」

「え？…あっうん。いない…。」

「じゃあ、俺がやったげる！」

「えっ！？　いいいいよ！　そんなの！　自分でやるから！」

「先輩…俺の事…嫌い…？　なの…」

は？
…

「いや…ちがう…あの…」

う…
どうしよう…。

「じゃあ…、俺がやる！」

「でっでも…」

「は？…俺様がここまで言ってんのにゆうこと聞かないとかまじないから。まっとにかくやるよ！。先輩」

怖…

「お願いし…ます…」

「分かればヨロシイ！。」

何やってんだろ、わたし…

「いたっ…」

今、治療中…
結構、痛い…かも…

「我慢して、小春先輩！」

「えっ！何でわたしの名前…。」

「ひ・み・っ！」

ん？…

「あっ、俺の名前は岡野龍だから名前で呼んでね。呼ばなかったらお仕置きな。」

「はっ！、お仕置きなんて…無理。」

ないないない… 絶対ない！

「あ”っ?」

…

「痛いっ…いたいって」

「ごめん、手がすべった。」

なに、その笑いかた…。

絶対わざとでしょ…。

「まっ。とにかく龍で！呼んでみ？」

「無っむり…」

「ん？…お仕置きかな？…」

「わっわかった…から。」

「りっ…りゅ…う…くん」

はあ…恥ずかしすぎて死んじゃうよ…。

「まあ今回はこれで許してあげる！」

龍くんのほほが赤いのは気のせい…？
だよね！

「じゃあ、俺いくね！小春！」

今、呼び捨てした…？

2

「はあ…昨日お礼いうの忘れた…」

昨日はあのあと普通に過ごした。
そして、今は教室で一人。

『キヤー』

何？この声…

女子達がいきなりさわぎだした。

「小春、いる？」

『えっ？小春さ…ん？そんな人いたっけ？』

『えゝ？知らないよゝ』

ん？ 小春って…

わたしは急いでドアの方を見た。

「あっ……。」

龍くん……？

「ん？」

やばい龍くんが部屋を見回してる。

皆にばれたら、大変だ。 隠れなきゃ…。

でも、どこに隠れよう？ 机、掃除箱、それとも……

「あっ！小春？」

？！

お仕置き？

「こゝはる！」

今、わたしの前に龍くんが…

「わっわたし…小春じゃ…ない…です…」

嘘、言ってみた。

「フッ。」

何、今の笑いかた…。

「キャッ…」

いきなり龍くんがわたしの腕を掴んできた。

「来い。」

「は?…」

『キャーゝなにー?』

『ちよつと、なんでアイツが龍様の隣にいるのよ』

この声を通り抜けて、教室を出た。

廊下を無言で引っ張られ、空き教室に入った。

ガチャ。

「なっなに？」

「小春？何で俺の事無視したの？…」

「…だっだって…、…皆いた…から…。ごめん…」

「ダメ。お仕置き。」

「えっ…」

「明日から、毎日…弁当もって屋上来て!!。」

「え？それがお仕置き？」

「うん！」

それだけ？

ふー、よかった。

お仕置きしてもっと怖いイメージだから…

「じゃあ、俺の分も作って来てね！」

「えっ…はい…。」

「フッ。じゃあな！」

とわたしの手にそっとキスを…して！？龍くんは帰って行った…。

「っ…」

なっ…なにされた？

今…わたし…

なぜか手と顔が暑いのが自分でもわかった…

ピ。ピ。ピ。ピ。

目覚ましをとめた。

今日は、龍くんのお弁当作らなきゃいけないから、早めに、起きた
：

わたしの親は、外国に旅にでている…。だから、1人
暮らし。まあ、時々電話来るけど…。

「わたしの分は、コンビニで買えば良いか…」

はあー… なに作ろう？

（こうして、考えてる間…嫌と思いつつ、笑顔の小春なのでした。）

「じゃあ、これで授業を終わります。」

先生がいう。

お弁当だから、多分昼休みだよね…。

はあー…

わたしは、お弁当をもって屋上に向かった。

そして、屋上に着くとまだ龍くんがいなかった。

「ふー。」

わたしは、少し深呼吸した

ガチャ

ん？ 龍くんかな…

ドアの方を振り向いた。

『あら、中山さん。アンタのくせに誰と待ち合わせかしら?』

げっ…

そう、そこにいたのはあの3人…

怪しい3人

『ねー、アンタ昨日、岡野龍に呼ばれてたわよね。もしかして、龍様と待ち合わせ何てことないわよね。』

「りっ龍…様？」

『そうよ、学園の王子、龍様。』

学園の王子って…

『ねー。そのお弁当…龍様に？』

「ちが……」

どうしよう…。

バシッ

頬をヒッパタかれた…

『アンタの癖に調子にのらないでよ!!』

「いたっ…」

3人はわたしの事を蹴ったり、殴ったり、してくる。

「ケホッ…イタッ…ケホッ、ケホッ」

『いいきみ。アハハッ!』

そして、3人はさって行ってしまった。お弁当をもって……。

体中が痛くて動かない…。

ガチャ

「小春く遅くなってごめ…って…小春?…」

倒れているわたしを見て驚いてるんだろうな…

「小春!…大丈夫か?…どこが痛い?」

龍くんはわたしを自分の方に寄せた。

「だっ…ケホッ大丈夫、夫…」

「嘘つけ…おまっ…」

そんな顔しないでよ…わたしまで泣けてくる…

「小春、泣いてるのか？…」

「グスッ…」

言葉が…でない…

「うっ…」

急に龍くんがわたしを持ち上げた…

「すぐ保険室行って怪我…治療ないと…！」

保険室

先生がいて、わたしは丁寧に治療を受けた。

「もう、どういう無茶をしたら、こんな怪我をするのかしら…」

先生が言った。

「すみません…」

「まあ、良いわ。わたしちょっと職員室に行って来るから。岡野くん、ちゃんと中山さんを見ていてね!。」

「はい!。」

「ごめん!小春:俺がもっと早く来てたら:。」
龍くんはベットのの上に座っているわたしの隣にすわった。

「いっ?いいよ!気にしないでください:。」

「誰にやられた?」

うつ…ここは言わない方が

「かっか…顔はわからなかったです…」

「そっか…変な事とかされてないよね?…」

「はっ…はい!」

「今度、見かけたら俺に言えよ!ぶっ殺してやる!」

無理無理無理ー

「なー。抱きしめて良い?…」

「は? い…ダメ、です…」

「拒否券ねえし…」

「ふっ…」

龍くんはわたしを抱きしめた…。

「ごめんな…」

そんな事、言われたら…
拒めないじゃん…

屋上

「はあー…」

結局あの後、わたしは2日学校を休んだ。

龍くんはなんでわたしなんかにあんな事…

わたし、本当に最近変だ…

な〜んて考えながら、教室で一人授業も聞いてない…

「じゃあ、これで授業をおわる。」

先生が言った。

…昼休みだ

あんな事があってもまだ
お仕置き中…

少し、緊張する…

屋上についた…

「あっ…」

「小春」

龍くんはもう来ていた。

「あんな事あって心配だから急いできた！」

「あっ…」

言いかけた「ありがとう」が途中できえた…

「食べよ！小春」

「あ…うん」

わたしは、お弁当を龍くんに渡して、コンビニのパンを取り出した。

「え？なにそのパン…」

「え…コンビニの」

「!なんで、小春だけ…」

「…」

「食べよ一緒に!」

え?でも…

「うん…」

わたしは、パンを半分にして龍くんに渡した。

「ありがとう！」

なんか、なんだろこの気持ち…

「ねー小春…スケッチ部の夏が宿、行くよね？」

そうだ！スケッチ部…わたし、スケッチ部…

【解説しましょう。小春はスケッチ部に入っていて今は「自分の好きな風景」についてスケッチの宿題がでていて、部はお休み！でも今度ほかの部と別で夏が宿があるのです。d y・Y U M E】

「俺も、スケッチ部だよ！」

「え？…」

「やっぱ、気付いてなかったか…で！夏が宿は？」

「もうお金、払っちゃったから…」

「やった〜！一緒に行けるな！」

龍くんはにこっと笑った。

ドキッ

部屋わけ

今は、H R 中…

「今日は、スケッチ部の皆さん、昼休みに図工室に行ってください。」

「

日直の人が言った。

昼休み…

あ！でも、龍くんもスケッチ部か…

「これで、授業が終わる。」

わたしは、図工室に向かった。

「これで全員ね。」

龍くんもいる…

「それじゃあ、今から夏が宿の部屋わけするわね。」

部屋わけ…

「まず、部屋は男女二人ずつよ！」

「決め方は…」

『先生！私たちが進めていいですか？』

1年の女子が二人：

「良いわよ！」

良いんだ：

『じゃーあ…まずは、男女別で好きな子とペアを組んでね』

え…困るな…

…

結局わたしは、あまった人と適当にペアを組みEチーム。

まあ、良いひとそうだし…
関係ないけど…

『じゃあ…次は、男子と女子をくっつけたいんだけるわね…』

『じゃーあ…Aチーム男子の○○君と▲▲君と同じが好きな人』

こういうの嫌だな…

しかも、誰も手あげないし

『Kチームの岡野君と佐野君と同じが好きな人』

は？

龍くんの時…に 女子がわたしを除いて全員、手をあげた…わたし
のペアの人も…

『ん…どうしよっか？』

自分たちもあげてるよ！

『岡野君達の意見を聞く？』

『賛成』

全員賛成…

『じゃあ…』

「俺は岡野にまかせる…」

もう一人の人がいう…

皆、ざわつく…

「じゃあ…中山小春さんと同じがいい！」

えっ…

ええ…

『は？冗談はやめよ、岡野君！』

「冗談じゃねーし…」

女子たちが騒ぎだす…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5142k/>

俺様王子×メガネ姫

2010年10月11日02時11分発行